

ウィリアム・サロイアンの幼・少年時代：彼の故郷 フレズノでの生い立ちを中心として

立 山 昇

(1995年5月10日受理)

— 1 —

ウィリアム・サロイアン (William Saroyan) は、筆者が思うに、日本の私小説家に似ている。私小説とは、作者の実人生が生そのまま作品に表現されるもの、という意味においての私小説に似ている。たとえば、サロイアンの代表作 *The Human Comedy* は、明らかにフィクションであるが、私小説的作品といえる。なぜなら、その中に作者の姿がかなり濃く出ているからである。同様に作者の育ったフレズノの町、その町の人々、自分の少年時代、そういった、作者を取り巻いていた、なまの生活の様子が、この作品には、数多く表現されている。

サロイアンの作品は、「私」を、作品の中に色濃く表現しているので、彼の作品を理解するためには、我々は、彼の人生、生い立ちを知らなければならない。そこで筆者はこの論考を、彼の出生前後から、彼がフレズノを去る17歳頃までのことを、主として、Brian Darwent (ed.), *The New Saroyan Reader*, と、William Saroyanの、*Days of Life and Death and Escape to the Moon, Here Comes There Goes You Know Who* の、3冊の本に助けをかりながら、述べてみたい。

— 2 —

ブライアン・ダーウェントのサロイアンについての伝記的スケッチ⁽¹⁾の助けを借りて、以下少し、サロイアンの幼・少年時代のことを述べよう。

サロイアンの父はアルメニアからアメリカに移住したのだが、まず最初にニューヨークに着いた。そしてカリフォルニアに移った。なぜカリフォルニアに来たかという、カリフォルニアがアルメニアに似ていたから、ということだ。その父からウィリアム・サロイアンは、4人目の子供で、次男として、1908年8月に生まれた。

父の名前は Armenak と言った。ところがこの父は、カリフォルニア州のサンノゼ (San Jose) で、36歳の若さで死んだ。ウィリアムが生まれた3年後の1911年であった。父が若くして死んだということは、ウィリアムにとって、大きな出来事であった。というのは、その後、母が4人の子供を育てなければならなかったが、おそらく貧困のゆえに、彼女は子供たちを、Oakland (カリフォルニア州) の孤児院に入れるのである。

父の死、貧困、孤児院生活、そして母の元に帰ってからは、貧しさゆえに、小学校に行きながらも、働かなければならなかったという、厳しい日々の生活。こういう幼・少年時代が、サロイアンに決定的に大きな影響を与えているのは間違いない。

ブライアン・ダーウェントは、サロイアンの父は“a failing fruit farmer”⁽²⁾ だったと言い、また“Armenak has also been a writer, an unpublished one.”⁽³⁾ と言っている。つまり、父アルメナクは「うだつの上がらぬ果樹園農民」で、ものを書くのが好きな人だったが、特に本を出版したりはしなかった、ということである。

この父の死後、“William, his brother Henry and his sister Zabel and Cosette”⁽⁴⁾ の、4人の子供たちは、カリフォルニア州オークランド (Oakland) (サンフランシスコ市と湾をへだてた隣の市) の the Fred Finch Orphanage (フレッドフィンチ孤児院) に、数年間 (正確には4年間) 預けられた。母一人では貧しくて、4人の子供を育てることができなかったために、やむを得ず、そうしたらしい。父が死んだ1911年に、ウィリアムは3歳で孤児院に入れられ、そこで4年間を過ごす。1916年、ウィリアムは6~7歳で孤児院を出て、母とともに、フレズノで住み始める。以上、主としてブライアン・ダーウェントの序文の内容に沿って述べてきた。

母と別れて、3歳の幼い子供が孤児院で生活し、しかも、小学校もそこから通っていた、ということは、母を想い、つらく、寂しい毎日であったろう、と思われる。そこでの生活について、サロイアン自身は、次のように言っている。

Life is great, even at the Fred Finch Orphanage, even in spite of matrons giving you a bath once a week, strange women with red noses and red hands lifting you up and dropping you down in the tub and scrubbing you. It was insulting, but it wasn't half bad as being out there in all that water of the dear ocean with no place to stand. *I love you California.*⁽⁵⁾

「人生とは素晴らしい。たとえ孤児院にいて、週に一回しか風呂に入れず、しかも知らない女の人に粗末に扱われて、風呂に入れられても、足もとどかぬ深い大海の中にほうり出されているよりは、まだましだったから。私はカリフォルニアが好きだ。」と言うのだ。孤児院生活はつらかった。しかし、人間に見捨てられ、寝るところもなく、食べるものさえない生活に比べると、まずいながらも食べ物は与えられるし、風呂に入れるし、ベッドも与えられる。それに小学校にも行かせてもらえる。決してそこでの生活が素晴らしかった訳ではなかったが、最低の生活よりはまだましだった、と言っているのである。

— 3 —

さて、次に視点を変えて、現在のフレズノについて述べてみよう。筆者は、フレズノに1年住んで研究生活を送っていたので、ある程度のことわかる。

Fresno (フレズノ) は、カリフォルニア州のちょうど中心部に位置した、San Joaquin Valley (サン・ウォーキン平野) の中心地にある。フレズノは、サンフランシスコから南方へ188km、ロサンゼルスから北方へ215kmのところにある。サン・ウォーキン平野は、大農業地帯で、果てしなく、広い広い農場が続く。その大平野の真ん中にフレズノはある。

フレズノ市の人口は約40万人程である。筆者の住んでいた Clovis (クロビス) 市が約4万人、この両市は隣接し、同じ都市圏を形成している。Fresno County (フレズノ郡) は、

フレズノ市、クロビス市、その他いくつかの小さな town が集まったもので、もちろんフレズノ市が、その中心をなしている。フレズノ市は、大平野の中にあるために、東西南北、碁盤の目のようにきれいに通りが作られ、町は広々と広がっており、日本の100万都市と同じくらいの広さがある。

市の中央部にフリーウェイ（高速道路）があり、東方面に飛行場がある。南方のダウントウンに Amtrak の駅があり、バスターミナルもある。飛行場は、北西に、小さい、個人所有などの小型機用のものが、もうひとつある。

現在もフレズノ市、クロビス市ともに、北方へと、どんどん住宅地が広がりつつある。広い畑を潰して、住宅地を次々に建設しつつあり、人口は年々増加している。

日系人は、正確には分からないが、少なくとも4,000人程度は住んでいる、と筆者は見ている。というのは、日本レストランやバーが、約20軒あり、そこに来る客の半数近くが日系人だからだ。全人口の中では1%にも満たないが、ある程度の数ではある。自動車販売会社を始め、日本の企業や銀行もある。日系人は、大学教師、医師など、高い地位についている人もいる。

サロイアンはアルメニア系の人だが、フレズノはアルメニア人の町だと、一般に言われているくらいアルメニア系の人の影響が強い、彼らの中には、成功して大富豪になっている人達もかなりいて、そういった人達は、大邸宅に住んでいる。人口全体の中では、白人が過半数を越えているようだが、その次にメキシコ人が多い。次はたぶん中国人だろう。市内のどこに行っても中華料理店がある。

気候は、雨が極端に少なく、冬の雨季に少し降るだけで、他の季節は、全くと言っていいくらい雨は降らない。3月半ばに摂氏30度を越え、8月頃には摂氏40度を越えることもしばしばある。とても暑いところだ。冬はほんの3ヶ月程で、雪は全く降らないが、やはり防寒コートが必要な位に寒い。暖房もやはりないと困るくらいの寒さであった。ハリケーンや台風といった大暴風はない。だから、家の造りなど、それほどしっかりしていなくてもよい訳で、事実、貧弱な屋根の家の多さに驚かされた。日本であれば、フレズノのほとんどの家の屋根は、台風で飛ばされてしまうであろう。ただし家の大きさはフレズノのほうが、ずっと大きい。

一般的には、暑さが強すぎる、という程度で、農産物は豊富で、豊かな、穏やかな所で、アメリカの中では住みやすい所であろう。

サロイアンが、幼・少年時代を過ごした所は、ダウントウンであろう。しかし、その現状はひどい。ビルは古びて、無人のまま捨てられたようになっていたり、人通りもまばらで、ゴーストタウンのような感じだ。フレズノも、他のアメリカの都市と同様に、殺人事件などの凶悪犯罪が、いつも起きているが、特にダウントウン地区はひどく、市民はそれを恐れて、近寄ろうとしないので、昼でも人通りが少なく、うらぶれたところになっている。そこはかつては、サロイアンが、新聞売りをしたり、学校に通ったりした、活気あふれる町であったのだろうが、今は見る影もない。

フレズノには、ホームレスの人々は約4,000人いるが、殆どの人が shelter（収容施設）に収容されていて、ダウントウンや他の地区でも、ホームレスの人々は、たまにしか見かけない。今は車の時代であり、高速道路、郊外や、新しく広がりつつある商店街や、ショッピング・モール、そう言った所に人々は集まり、車と飛行機が、交通の中心になっている。ダ

ウンタウンにある、アムトラック（鉄道）の駅には、人の数は少ない。昔は主要交通機関だったと思われる、大きな駅の建物は、古びて、さびしい姿をさらしている。1日に上り、下りともに3回程しか、列車は動いていない。それも4~5両だけの連結である。その代わり飛行機の利用はめざましく、飛行場からは、次々と大小の飛行機が飛び立っている。まさに今は、飛行機と自動車の時代である。しかし、他の都市と同様に、フレズノでも、自動車の排気ガスによる公害が起きている。

サロイアンの幼・少年時代に town であったフレズノは、今では都市化して、大きくなり city になっている。田舎町から、地方都市になり、その地域の産業の中心地となっている。しかし、都市の持つ、犯罪、冷たさ、無機質性といったものをも合わせ持っていることは、悲しいことである。

— 4 —

サロイアンの故郷フレズノの現状は、前節で述べたとおりである。

次にサロイアンの少年時代のことに戻りたい。サロイアンは、孤児院からフレズノに戻って来るのだが、それは6~7歳の時である。孤児院から小学校に通っていたのだから、サロイアンが小学校の1~2年生くらいの時に、フレズノに移ってきた、と言えよう。

フレズノでの小学校時代に、彼は、依然として貧しい家計を助けるために、新聞売り等をして働かなければならなかった。ダーウェントは、このことを、次のように書いている。

While still at school he had sold newspapers in his spare time...

Later he became a messenger with a postal telegraph company...⁽⁶⁾

学校に通いながら、仕事もしなければならぬということは、遊びたいさかりの、小さな子供にとって、つらく、苦しいことであったと思われる。

サロイアンは、学校では、どんな風だったのだろう。彼自身が、次のように述べている。

... but I hated school, I hated teachers, so why did I feel I was losing something? Well, obviously, because *she* felt she was, but I didn't look at it that way at the time.⁽⁷⁾

ここで“she”というのは、学校の女性の先生のことを指している。「なぜ私は、何かを失いつつあると感じたのか？ それは先生自身が何かを失いつつあると感じたが故に、私はその当時、そう感じていたのだ。そのことが、今になって分かったが、その当時は、その訳が分からなかったのだ。とにかく自分は、学校を憎み、先生たちを憎んでいた。」と、彼は言うのである。つまり、当時先生自身が、不充足感を抱いて、生徒である自分（サロイアン）を教育していたので、教育される側の自分も、その教師のもつ不充足感に影響されて、不充足感を抱くようになったのだ、とサロイアンは言いたいのである。つまり彼は、教師を批判しているのだ。それだから、当時は、「学校を憎み、教師を憎んでいた。」と言うのである。サロイアンは、学校教育は、自分をだめにしてしまうものだ、と思っていたのは間違い

ない。

サロイアは、学校や教師に、かなり批判的であるが、それは、サロイアが、大人っぽかったからではなかろうか。なぜ大人っぽかったかという点、最大の理由は、幼くして母のもとを離れ、孤児院生活を送り、苦しみを味わったことと、小学校の時から、家計を助けて、働かなければならなかったことであろう。それにもう一つは、彼が、アルメニア移民の子供であったことである。つまり、アメリカでは少数派に属するために味わわされた、心の痛みといえるだろう。

サロイアは次のように言っている。

I didn't learn very much about writing from books, ...
but mainly I learn from other things, from things I saw and heard in the street, and in the theatres.⁽⁸⁾

ここで彼は、「書く」事について言っているのだが、このことは、教育全般についても、同様のことを考えていた、と言えるのではないだろうか。つまり、サロイアが教育を受けたのは、学校や教師からと言うよりは、街や劇場で、自分が見たり聞いたりした事柄からだったのではないかと思われる。そのために、サロイア自身は、同年齢の子供達より、ずっと大人っぽくなった、と言えるだろう。

サロイアは、自分の大人っぽさについて、次のように言う。

In 1919 when I was ten going on eleven I believed the world couldn't fool me.⁽⁹⁾

また、次のようにも言う。

By 1919 I had come to feel old and wise, so perhaps I had a right to feel, as perhaps I was, in fact.⁽¹⁰⁾

彼が11歳になろうとしていたとき、すでに自分は「世間には馬鹿にされない」とか、「年とっていて、かしこい」と、感じていた。まだ小学生であったことを考えると、普通一般の子供達より、はるかに、生意気で、大人っぽい考えに達していたと言える。こういう子供は、先生の側から見ると、ちょっとやっかいで、手に負えない、そんな生徒だったのではなかろうか。

次は、サロイアと学校の女の先生のやり取りである。

"The Americans don't like us, so we don't like them."

"So that's it. Which Americans don't like you?"

"All of them."

"Me?"

"Yes, you."⁽¹¹⁾

これはフィクションではなくて、学校での、サロイアンと女の先生との対話なのである。「アメリカ人は皆、我々アルメニア人が嫌いなのだ。先生も私を嫌っている。だから私は、アメリカ人が嫌いだし、アメリカ人である先生も嫌いだ。」とサロイアンは、言ってる。ここには大人っぽさとともに、アルメニア人としての意識が、同時に現れている。

とにもかくにも、サロイアンは、学校と先生を嫌っていた。それは、サロイアンが普通の子供よりも、ずっと大人っぽかったが故に、と言うのが最大の原因であるようだ。

— 5 —

前節では、サロイアンの、主としてフレズノでの学校教育について述べた。次には、フレズノがサロイアンにとって、どういう意味をもっているかについて、述べてみよう。サロイアンは次のように言う。

What does it mean to be in Fresno? Well, I am here by choice, so it means at least *that*.⁽¹²⁾

彼は偶然フレズノにいるのではなくて、自分の意志で、進んでここにいるのだ、というのである。彼はどこに住んでもよかろうに、このフレズノの町を、自分の住むところとして、選んで住んでいる、と言うのだ。自分が住むところとして選んだ町は、自分の生まれたフレズノであった。若いころ、厭になって、一時町を飛び出し、都会へ出て行ったが、最後には、自分の故郷に戻って来て、そこに住み着いてしまったのである。

サロイアンは、同じ本の中で、次のようにも言っている。

Maybe I'm in Fresno on behalf of my father, who came here with his family in the early summer of 1908, just before I was born.⁽¹³⁾

サロイアンが生まれたのは1908年8月であるが、その少し前に、彼の父は家族を連れて、ニューヨークからフレズノに来た。アルメニアから移住した父の、最後の希望を託したカリフォルニアのフレズノ、しかも自分が生まれた町。サロイアンは、父の希望の土地だったフレズノに、自分は住もうとしているらしい、と自分自身を分析している。

— 6 —

サロイアンは、とにもかくにも、フレズノに住むところと決めて、そこに住み、作家活動を続ける。彼は、何回かの離婚を体験したり、またギャンブルに夢中になり、持ち金全部をつぎ込んだりと、かなりむちゃな生活をしていたが、それにもかかわらず、破壊的な生活を望んでいたかということ、そうではなく、むしろその逆であったのではなからうか。

サロイアンには、home についての言及がかなりあるが、その中から、まず次の言葉を引用しよう。

ウィリアム・サロイアンの幼・少年時代：彼の故郷フレズノでの生い立ちを中心として

Well, first of all, just where was my home? Was it Fresno, where I was born? Was it San Jose, where my father died? Was it Oakland, where I spent four very important years?⁽¹⁴⁾

自分にとって home とは、いったいどこにあったのか、とサロイアンは自問する。それは、自分が生まれたフレズノか、それとも、父が死んだサンノゼか、あるいは、自分が孤児院で4年間の生活を送ったオークランドか、と問うのである。その自問を、彼は次のように結んでいる。

Well, I didn't know, although I suspected it was quite a matter of that kind at all.

Home was in myself, and I wasn't there, that's all. I was far from home.⁽¹⁵⁾

「home が自分自身の中にあった。」とは、どういう意味であろう。サロイアンの心の中に、home を求める気持ちが強くあった。しかし現実には home はなく、ただ home を渴望していただけで、自分は、home というものから、遠く離れていたのだ、ということを知る。

サロイアンは、同書の中で、home について、次のようにも述べている。

It was probably us, a family, a continuous and difficult if not frequently impossible state of being together, all of us in the same place.⁽¹⁶⁾

home とは、我々みんなが、継続的に一緒にいる状態だろう、と言う。これは一般的な home というものであろう。問題なのは、サロイアンの場合には、それが得られず、いつも、home から遙かに離れていたということであった。3歳で母から引き離され、他人のもとで育てられなければならなかった。では、母のもとに引き取られてからは、どうだったのか、というと、どうもこれまでの彼の言及を見る限り、母と4人の子供から成る home も、幸せなものではなかったのではないかと、とも思われる。成人してからは、数回の離婚の体験もしている。home を求め続けていたが、彼には、本当に満足する home は得られなかったと言えるだろう。

— 7 —

サロイアンは、home を切望していたが、それが得られなかった。しかも、学校や教師を嫌っていた。そのために、ウィリアム少年は、故郷のフレズノを去ろうと決心するのである。その間の事情をサロイアンは、次のように書いている。

When I was seventeen, for instance, I wanted to get out of town because I seemed to be fighting everybody. I had been kicked out of school so many

times that I finally left for good when I was fifteen and went to work with Mexicans and Japanese on one of Aram's vineyards, ...⁽¹⁷⁾

サロイアンが15歳（高校生）の時、彼は学校を去る。いわゆる中退で、その原因は、学校の教育に嫌気がさしたからのようだ。そして、しばらく、フレズノで働いた後、ついにフレズノを去ろうと決心する。去る決心をしたのは、1926年7月で、彼が17歳の終わり、もうすぐ18歳になろうとしている時であった。その辺りのことを、サロイアンは、別の本の中では、次のように書いている。

I began to leave in 1926, when I was pretty well along in years, almost eighteen, after having had a full decade of important growth in the busy town.⁽¹⁸⁾

17歳の時、彼は、自分の生まれ育った、フレズノを去ろうと決心する。高校を中退した彼は、仕事をしてみても、そこでは希望がもてず、何か素晴らしい夢を求めて、大都会へ出て行こうとしたのではなかろうか。そこで彼は、フレズノを去り、ロサンゼルスへ行き、そこで仕事につくが、病気になり、わずか2週間で、大都会での夢は挫折するのである。夢破れた彼は、フレズノへ帰り、そして、再び、フレズノを後にするのである。

— 8 —

ウィリアム・サロイアンは、フレズノの作家である。フレズノに生まれ、幼少の4年間をオークランドで過ごしたが、あとは、フレズノで少年期を過ごした。そして17歳の時、フレズノを去るのであるが、それら、幼・少年期の、主にフレズノでの生活を中心に述べてきた。

サロイアンは、センチメンタルな作家であると言われるが、彼の文学を知る場合に、彼の生い立ちを知る事は、大変重要である。3歳の時、父が死に、それから4年間、孤児院に入れられ、小学校の時から、貧しい家計を助けて、働いていた。また、彼がアルメニア人の移民の子供であったということ、こういった彼のおかれた、家庭や、環境、そして生まれ育った町フレズノを知ることが、彼の文学理解の上では、重要である。

ロサンゼルス、サンフランシスコ、ニューヨーク等の大都市に行ってみるが、結局、失敗に終わり、フレズノに戻ってきて、そこに定住して、作家としての活躍をするのだが、この論考では、サロイアンが、フレズノを出るところまでで、終わりたい。

注

- (1) Brian Darwent(ed.), *The New Saroyan Reader*, Creative Arts Books Company, 1984 この本の序文として、サロイアンについての“Biographical Sketch”を B. Darwentが書いている。
- (2) Ibid. 序文。
- (3) Ibid. 序文。

- (4) Ibid. 序文。
- (5) William Saroyan, *Here Comes There Goes You Know Who*, Simon and Schuster, 1961, p. 101.
- (6) Brian Darwent (ed.), *The New Saroyan Reader*, Creative Arts Book Company, 1984 ダーウェントが書いた序文よりの引用。
- (7) William Saroyan, *Here Comes There Goes You Know Who*, Simon and Schuster, 1961, p. 88.
- (8) Ibid., pp. 37-38.
- (9) Ibid., p. 43.
- (10) Ibid., p. 44.
- (11) Ibid., p. 87.
- (12) William Saroyan, *Days of Life and Death and Escape to the Moon*, the Dial Press, 1970, p. 62.
- (13) Ibid., p. 75.
- (14) William Saroyan, *Here Comes There Goes You Know Who*, Simon and Schuster, 1961, p. 114.
- (15) Ibid., p. 115.
- (16) Ibid., p. 115.
- (17) Ibid., p. 56.
- (18) Brian Darwent (ed.), *The New Saroyan Reader*, Creative Arts Book Company, 1984, p. 257.